"Flowers for Algernon"——原作と翻訳——

野　宮　亜希子

専門ゼミナールⅡで、***"Flowers for Algernon"***に入る前に、私は「アルジャーノンに花束を」読んでみた。訳本ではあったが、私は話に引き込まれ、あっという間に読んでしまった。

元々私は本が好きだ。映画等の映像よりも文章の方が、微妙なニュアンスが伝わり、面白く感じることもよくある。外国の小説は、訳者によって全く違う作品のように感じられることもある。けれども原作には、そのような心配はない。

ゼミで取り上げたのは、話を多少省略したものだが、大すじに変わりはない。訳本も気に入った私は、原文のどのような文章が、このように訳されているのだろう・・・・・と、とても楽しみになった。

さて、主人公のチャーリー・ゴードンは、知能は低いが、真面目で一所懸命な男性です。彼は、話をする時には、必ずといってもいい程どもります。—これは前半のセリフ読み分けのいい着眼点となった—私達が話をする時に、ちょっとどもるというのは、簡単に想像できるが、外国人が英語で・・・となると少し想像しにくい。しかし、読んでいるうちに、スペルの間違いや、どもりの様子からチャーリーのとても一所懸命な所が伝わってくるようになってきた。知能が3倍になるという手術を受けたチャーリーは、あっという間に賢くなる。難しいことを勉強し、考えるようになり、英文はどんどん難解なものとなる。

賢さを手に入れたら、それまでよりも多くのものが手に入ると信じていたチャーリーは、気づかない間に、人を思いやる優しい気持ちをなくしていき、自分でも気づきます。

訳本を読むことによって、小説の内容はすぐに分かりますが、原文は、多少難しい部分があっても、1つ1つの単語から色々な細かい意味を読みとることができ、想像がどんどん広がっていく気がする。

今までも何度か原書を読んでみようと思う小説があったが、なかなか最後まで読み通すことができなかった。ゼミを通して***Breakfast at Tiffany's***と***"Flowers for Algernon"***を読み、とても勉強になった。

今後は自分で何かを最後まで読んでみたいと思う。今、一番読んでみたいのは、***The Bridges of Madison county***（『マディソン郡の橋』）です。

（指導教員　中村　敦志）